

日本の名作名文ハイライト

吾輩は猫である

夏目漱石

朗読 えぷろん

出所 えぷろんの朗読本棚

<http://epuron-rodoku.seesaa.net/>

teabreak 編

吾輩は猫である

夏目漱石

●第二章中途

―三毛子を訪問

こんな失敗をした時には内において御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。いつその事気を易えて新道の二弦琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようと思つた。三毛子はこの近辺で有名な美貌家である。我輩は猫には相違ないが物の情けは一通り心得ている。うちで主人の苦い顔を見たり、御三の険突を食って気分が勝れん時は必ずこの異性の朋友の許を訪問していろいろな話をする。すると、いつの間にか心が晴々して今までの心配も苦労も何もかも忘れて、生れ変わったような心持になる。女性の影響というものは実に莫大なものだ。杉垣の隙から、いるかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新しいのをして行儀よく椽側に座っている。その背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。曲線の美を尽している。尻尾の曲がり加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよいちよい振る景色なども到底形容ができません。ことによく日の当る所に暖かそうに、品よく控えているものだから、身体は静肅端正の態度を有するにも関わらず、天鷲毛を欺くほどの滑らかな満身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむらと微動することくに思われる。我輩はしばらく恍惚として眺めていたが、やがて我に帰ると同時に、低い声で「三毛子さん

三毛子さん」といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやらちやらと鳴る。おや正月になつたら鈴までつけたな、どうもいい音だと感心している間に、我輩の傍に来て「あら先生、おめでどう」と尾を左りへ振る。我等「猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと回すのである。町内で我輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。我輩は前回断わった通りまだ名はないのであるが、教師の家にいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生といつてくれる。我輩も先生といわれて満更悪い心持ちもしないから、はいわいと返事をしている。「やあおめでどう、大層立派に御化粧ができましたね」「ええ去年の暮「御師匠さんに買って頂いたの、宜いでしょう」とちやらちやら鳴らして見せる。「なるほど善い音ですな、我輩などは生れてから、そんな立派なものを見た事がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」とまたちやらちやら鳴らす。「いい音でしょう、あたし嬉しいわ」とちやらちやらちやらちやら続け様に鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大変あなたを可愛がっていると見えますね」と我身に引きくらべて暗に欣羨の意を洩らす。三毛子は無邪気なものである「ほんとよ、まるで自分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だつて笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑えるものがないように思っているのは間違いであ

る。我輩が笑うのは鼻の孔を三角にして咽喉仏を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの所の御主人は何ですか」「あら御主人だって、妙なね。御師匠さんだわ。二弦琴の御師匠さんよ」「それは我輩も知っていますがね。その御身分は何なんです。いずれ昔しは立派な方なんでしょうな」「ええ」
君を待つ間の姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二弦琴を弾き出す。「宜い声でしょう」と三毛子は自慢する。「宜いようだが、我輩にはよくわからん。全体何というのですか」「あれ？ あれは何とかってものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きているくらいだから丈夫といわねばなるまい。我輩は「はあ」と返事をした。少し間が抜けたようだが別に名答もでてこなかったから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大変好かったんだって。いつでもそうおっしゃるの」「へえ元は何だったんです」「何でも天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行った先きの御っかさんの甥の娘なんだって」「何ですって？」「あの天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいった……」「なるほど。少し待って下さい。天璋院様の妹の御祐筆の……」「あらそうじゃないの、天璋院様の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました天璋院様のでしょう」「ええ」「御祐筆のでしょう」「そうよ」「御嫁に行った」「妹

の御嫁に行ったですよ」「そうそう間違った。妹の御嫁に入った先きの」「御つかさんの甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「ええ。分ったでしょう」「いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。つまるところ天璋院様の何になるんですか」

「あなたもよっぽど分らないのね。だから天璋院様の御祐筆の妹の御嫁に行った先きの御つかさんの甥の娘なんだって、先っきっから言ってるんじゃないですか」「それはすっかり分っているんですがね」「それが分りさえすればいいんでしょう」「ええ」と仕方がないから降参をした。我々は時とすると理詰の虚言を吐かねばならぬ事がある。

障子の中で二弦琴の音がぱったりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらっしやるから、私し帰るわ、よくって?」「わるいといったって仕方がない。「それじゃまた遊びにいらっしやい」と鈴をちやらちやら鳴らして庭先までかけて行ったが急に戻って来て「あなた大変色が悪くってよ。どうかしやしなくって」と心配そうに問いかける。まさか雑煮を食って踊りを踊ったともいわれないから「何別段の事ありませんが、少し考え事をしたら頭痛がしてね。あなたと話してもしたら直るだろうと思って実は出掛けて来たのですよ」「そう。御大事になさいまし。さようなら」少しは名残り惜し気に見えた。これで雑煮の元気もさっぱりと回復した。いい心持になった。